柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話:070-1503-6401、044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 123 号

多摩丘陵に残る
義経の面影-1

史話が残されていない？（１）

麻生観光協会理事　麻生歴史観光ガイドの会 名誉会長　松本良樹

対 面 石

私は10数年前、源頼朝と義経が涙の対面を果たしたという黄瀬川の近くにある八幡神社を訪ねたことがあります。当時の面影はないものの、境内の奥まったところに『対面石』という石が二つ置いてあり、奥の石に頼朝が、手前の石に義経が座り、往時を忍び涙の対面を果たしました。

この後、義経は鎌倉に住んだと思われますが、何故か義経に関する史話は、鎌倉には何も残っていません。源家3代が滅び、北条執権の時代となった時、天下の大罪人であった義経には、情けを通わす鎌倉人はいなかったのでしょうか？ しかし、全国的に見れば『判官ひいき』と言われるほど絶大なる義経びいきが蔓延しており、不思議でなりませんが皆さんは、どう思われますか？

この時の情景を、日本画家の安田靫彦（ゆきひこ）さんが大作として残しておられますので、ご紹介いたします。縦は約1.7メートル、横3.7メートルの6曲屏風に描かれ、昭和15年11月（紀元 2600 年）に『義経参着』と題し発表されました。翌年の9月には頼朝を描き、右隻と共に『黄瀬川陣』として第28回院展に出展されました。

伊豆に流されていた頼朝が、平氏打倒の挙兵を図るが、石橋山合戦で敗れ房州に逃れる。その後上総や下総で東国の武士を糾合して鎌倉へ入る。富士川まで押し寄せてきた平氏との戦いを前に黄瀬川の陣に居た頼朝のもとに平泉から手兵を率いて馳せ参じた義経と20年ぶりに再会する場面を描いたもの。

『 黄瀬川陣 』

帷幕の青畳にどっかと座り弟をじっと見る頼朝。頼朝から離れた地面に鎧兜をつけたまま、立膝で兄を見上げる義経。美しい若武者の顔は引き締まり、緊張感がみなぎっています。華やかな衣装と精緻に描かれた武具が強烈な印象を与え、清和源氏の末裔らしい気品と華麗な雰囲気が漂う名画です。

頼朝を描くにあたっては、京都神護寺の国宝 頼朝像に拠ったと言われており、着衣や武具類も厳密な考証がなされていると言うことです。

『 義経参着 』

義経に関する古文書は『平家物語』『吾妻鏡』『義経記』等、各種ありますが、この地での活動に関して記載されている古文書は、どういう訳か一切ありません。

治承4年（1180）10月21日、駿河の黄瀬川のほとりにある八幡神社で兄頼朝と対面し、涙を流しながら語りあった義経は、鎌倉に住んだと思われますが、何処に住んでいたのか、何をしていたのか、どんな部下がいたのか、生活の様子は全く分からないのです。本来ならば鎌倉での生き様は、いろいろな伝承・伝説として残っていても不思議ではありませんが、どういう訳か全く残っていません。

（つづく）

シリーズ
「麻生の歴史を探る」　第93話

豪商藤屋　～行商黒川屋・栗木屋～

小島　一也（遺稿）

柿生駅南口の藤屋ビル（後ろはサープラス柿生）

柿生駅南口のロータリー、タクシー乗り場の前に藤屋ビルと呼ぶ二階建ての商店棟があります。ここは前述した津久井往還屈指の豪商、藤屋のあったところで、昭和30年代までは3つの蔵と母屋の間には樹齢300年ほどの大きく傘状に枝を張った柘植（つげ）の木が残されていました。

この藤屋は文化・文政の頃（1804～）より、この地方の炭を買い集め、江戸に送り、塩や油の日用品を持って帰る仲買問屋で、天保二年（1831）には、遠く相模、津久井方面の炭まで買い求めています。相模原大沼新田中里源兵衛家の炭上帳（中里博家文書、この家は千俵の炭を生産していた）によると、納めた問屋は上麻生村藤屋鉄五郎、高石村源左衛門、五反田村忠左衛門、長沢村万屋半兵衛、長尾村彦七と記されており、長沢の万屋を除いては仲買人と思われます。通常炭俵は八貫目俵（30Kg）と四貫目俵（15Kg）があります。相模原大沼からは往復1日の日程で、健馬の背には四貫目俵が8俵積めたようです。炭の値は、年により変動があったでしょうが、3駄（24貫）で1両だったそうで、馬の駄賃は350文（馬子を含め）。中継地でもある津久井街道のこの藤屋は天保の頃当時13棟の蔵、納屋、店があり、出入り使用人は25人を数え、毎日台所は１斗のコメを炊いたそうです。

この人達の中には近郷近在の炭を焼く人もいたと思われ、藤屋は代々鉄五郎を襲名して明治維新の頃まで続きます。末裔の鈴木家に伝わる話では、天保四年（1833）の江戸の大飢饉と火災の折には、仕入れに使う金を難民救済に使い、当時の瓦版（新聞）に出て、鉄五郎は代官から裃（かみしも）をいただき、大勢の人が集まる正月の初荷には半纏（はんてん）が褒美にふるまわれたと語られています。

江戸町民の生活文化が向上し、長屋にも畳が敷かれ火鉢が置かれると、江戸百万町民の炭の消費量は享保十一年（1726）81万5千俵だったものが、幕末の文久年間（1861～63）には、その3倍ものおよそ283万俵と需要を増していることからも、藤屋に限らずこの頃、いかに炭の商いが盛んだったかわかります。それが藤屋のような仲買問屋を生んだ原因でありますが、この地方の村には、もう一つの背景がありました。

江戸中期、幕府の農村対策は豪農を減らし、小農を救う中農施策にありましたが、実際にはその逆で大農家、貧農家が増え、従って多摩・相模の優良な薪炭源を持ちながら、この地方の農家は多額な費用を要する炭焼窯は資力ある者しか持てませんでした。多くの場合農民は「切子」と言って、地主の山の薪を切り炭を焼いて賃稼ぎをしたり、窯を借りたりしたもので、炭が村の大きな副収入とはなったものの、農業だけでは生活できない村の次男や三男・小農は、商品経済の中、江戸という大消費地を相手に行商となり、これを農間渡世と言いますが、この農間渡世は藤屋のような炭問屋にも及んでいました。

しかしその一方、江戸へ出る行商の中には、炭の需要が増すにつれ、仲買問屋を通さず、直接町民に卸す者もでてきます。それは江戸に店を持ちたい、の当然の思いで、この中には黒川村の松兵衛、栗木村の弥兵衛の名がありました（広川英彦氏研究）。これを拒んだのが天保改革”人返しの令”で、これは幕府が村を捨てる農民を取り締まっての令で、都筑橘樹郡内の農間渡世人の調査をしています。だが嘉永四年（1851）「江戸竹木木炭薪問屋」と記された名簿には「松屋町嘉右衛門借地、栗木屋弥兵衛」「松屋町茂兵衛店　黒川屋松兵衛」の名があることから、栗木黒川出身の弥兵衛と松兵衛は行商人から身を起こし松屋町で助けあって炭屋の看板を掲げていることがわかります。この名簿には松兵衛等の他に都筑屋利三郎・稲田屋弥兵衛・稲毛屋定右衛門などの名が記されており、これらはすべて芝・飯倉・滝山・木挽町などで店を借り、借地・借家料を払い、幕府に冥加金（営業代償）を納めての苦労の末の開業であったと思われます。藤屋跡は今に残りますが、高石の仲買問屋源左衛門店は長屋坂か笠原商店（かしや）だったのであろうことはおよその見当はつきますが、栗木の弥兵衛、黒川の松兵衛はどこのご先祖だったのでしょうか。

参考資料:「黒川炭と庶民の歴史（広川英彦）」「川崎市史」「ふるさとは語る（柿生郷土史刊行会）」「津久井街道（稲田図書館）」

シリーズ
教育の歩み 第１部

学校の誕生と成長（１１）

小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆カトリックの対応◆

ルターの登場以降、布教に印刷術と書物を利用する事について、プロテスタントに遅れをとっていたカトリックも、16世紀半ばになると、カトリックの再建と再生を目指して、イエズス会を先頭に対抗宗教改革の困難な道を進み始めます。この時からカトリックも分かりやすい簡単な言葉と図解で、自分たちの教えを民衆に伝えようと、地域語を使った絵入りパンフレットなどを多用するようになります。

この点で恰好な例となるのが、1582（天正10）年に九州の諸大名の名代として、ローマに派遣された天正遣欧少年使節団です。この使節には、正式の使節である4人の少年の外に、印刷技術の習得を目的とした、いわば技術要員として、2人の少年が加わっていました。少年使節団の派遣を、九州のキリシタン大名に強く働きかけたのは、イエズス会のインド以東における最高責任者、ヴァリニャーノ神父でした。彼の狙いは、ローマからの資金支援の拡充と共に、カトリックの布教に効果が期待できる絵入りの書物を日本で出版するための印刷機の入手にありました。2人の少年の任務は、欧州滞在中に、印刷機の取り扱いと金属活字の製造法を習得することにあったのです。2人は、帰路の船中や、立ち寄ったインドのゴアなどで、何点かの書物を出版するまでに腕を上げ、帰国後は、徳川幕府によってキリスト教が厳禁されるまで、併せて200点を超える書物を出版しています。当初は、スペイン語やイタリア語の書物でしたが、次第にローマ字本となり、やがて平仮名と片仮名による仮名文字本となり、最後には易しい漢字交じりの本まで、出版しています。印刷機は 1613 年に破壊され、2人の少年によって日本に持ち帰られた印刷技術は途絶えてしまったのですが、書物の一部は、それを隠し通した人々の努力によって焼却を免れ、キリシタン本として今日に残されました。イエスの教えを易しく説明した信仰本やイソップ物語りを初級者向けに易しく訳した本など、我々にも馴染のある書名が並んでいます。カトリックもプロテスタントに習って、やさしい宗教書の出版が、民衆の信仰心の涵養に効果がある事に気付き、出版物を上手に活用する事によって、信者の拡大に成功していったのです。

キリシタン本の１冊。上にローマ字で「ニッポンのイエス」と下に片仮名で「ドチリナキリシタン」と記されている。（天理大学図書館蔵）

◆フランスの女子教育◆

フランスでは、1562 年から 1598 年まで30年以上を費やした宗教戦争（ユグノー戦争）という名の内乱がようやく終り、17世紀と共に、誰もが渇望した平和な時代を迎えました。こうして特に遅れの目立っていた女子教育に、ようやくかすかな光があたるようになります。女子教育を担当する女子修道会が各地に建設され、修道会への入会志願者も増え続ける現象が起きたのです。修道女たちは、自ら学ぶとともに、子どもたちへの教育も担当し、さらには貧民や病人を助け、捨子を養育するなど、献身的な活動を続けたのです。

修道会への志願者の多くは、領主やブルジョワ、富裕な農家の娘たちなどでした。これはフランスに限らないのですが、当時のヨーロッパの結婚は、花嫁の家庭からの持参品が有利な縁談をまとめる上で欠かせない条件だったのです。僅かな持参品で満足するのは、貧困家庭同士の縁組に限られていたのです。釣り合いのとれた縁組を望むとなると、相応の負担は避けられなかったのです。この点は、公証人が作成した当時の結婚契約書を見れば一目瞭然です。なにしろ捨子として修道院で育てられた娘が結婚する場合でも、持参品のリストが作られているのです。豊かな領主やブルジョワの家庭でも、娘が3人いると破産確実とまで言われたのです。この苦境を切り抜けるには、娘の内の最低1人を神に仕えて一生を独身で過ごす修道女にすることが、最善の道でした。持参品に比べれば、ずっと少ない喜捨で修道院は喜んでくれます。その上、身内の1人が家族のための祈りを、日々捧げてくれるのです。こんな有難い話はそうそうありません。

ヴァンサン・ド・ポール。 1620 年代以降、フランス各地に修道会を創立、とりわけ修道女会の創立と修道女の教育に熱心に取り組んだ。

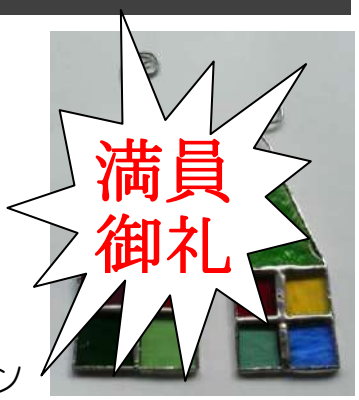
こうして修道会は繁栄し、17世紀を通じて増え続けました。とりわけ17世紀の半ば頃から、都市部を中心に、貧しい子どもたちのための無料の慈善学校が、教会と篤信家たちの支援によって誕生するようになったのです。貧困家庭の子供や身寄りのない子ども達に、キリスト教教育を施し、読み書きも教えるのです。こうした子どもたちが放置されたままでは、やがて悪に染まり、治安を乱すならず者になりかねません。そのような危険を未然に防ぐためにも、浮浪児を学校に集めて、規律通りに行動し、善きキリスト教徒に育つような訓練を施す。こうした意図も隠されていたのです。やがて慈善学校の教師の団体や教師の養成機関も誕生し、都市部の慈善学校設立運動は、さらに活発になったのです。　（続く）

柿生郷土史料館催物案内　【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日　（原則として月4回）
8月　4・11・18・25日（毎土曜日）　9月　2・9・16・23日（毎日曜日）
◎開館時間:午前10時～午後3時　（9月30日は休館です）

サマースクール　ステンドグラス　どうやって作る？

ご一緒にステンドグラスを作ってみませんか。
お好きなガラスを選んでオリジナル作品が作れます。



日　時　平成３０年８月１８日（土）　午後１時～３時
会　場　柿生中学校　金工･木工室
講　師　栗山　美咲先生（王禅寺在住）
対　象　小学校3年生～中学校3年生　先着40名まで
参加費　1名につき500円　（材料費等の実費　当日徴収）
持ち物　上履き、飲み物（ペットボトル可）、軍手、雑巾、エプロン
申し込み　氏名、学年、学校名、連絡先電話番号とFAX番号またはメールアドレスを記載して、下記までファックスまたはメールで申し込んで下さい。
なお、メールで申し込まれた方は、PCメールの受信拒否は解除願います。
申し込み先　小林　044-989-0757（FAX専用）　zabi@za.wakwak.com

締め切り：8月4日（土）

問い合せ　柿生郷土史料館企画担当　小林基男
080-5513-5154、044-989-0622、zabi@za.wakwak.com

第76回 カルチャーセミナー　早野上ノ原遺跡の発掘調査について
～川崎市内有数の複合遺跡を掘る～

早野上ノ原遺跡（戒翁寺の裏山です）の発掘によるこれまでの成果と、今年再開された発掘によって、新たにわかった最新の成果を踏まえて、考古学の楽しさを、お伝えしたいと考えています。

講師：栗田　一生氏　（川崎市教育委員会文化財課　学芸員）
日時：９月２３日（日）午後１時30分～３時30分
会場：柿生郷土史料館特別展示室

第15回 特別企画展　新聞記事に見る大正から昭和へ

平成天皇の譲位を来年に控えた今、大正天皇の崩御による昭和天皇の即位を当時の新聞はどのように報じたか。そこでは、国民の受け止め方や諸外国の反応は、どのように捕えられていたのか、当時の新聞記事や写真を展示します。記事に目を通しながら、皆様お1人お1人、ご自由にお考えいただけたらと、考えております。

期間　9月2日（日）～12月22日（土）　会場　柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。手作り史料館に参画しませんか。
会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付などの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページhttp://web-asao.jp/hp2/k-kyoudoをご覧ください。